



社会の時間意識 過去・現在・未来の時間

(Citation)

社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:95-96

(Issue Date)

2022-06-30

(Resource Type)

research report

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009416>



第3部 社会の時間意識 過去・現在・未来の時間

自分がいまだどのように生きているのか、あるいはどのように生きるべきかということ、個人がふと立ち止まって考えるとき、その個人の生き方と、その個人が自分の過去や未来をどのようなものと捉えているのかという時間意識とは、切り離して考えることができない。

つまり現在の生き方は過去や未来の展望と密接に関わり、過去や未来の像はいま現在のあり方を反射的に映し出す。苦しい過去をくぐり抜けてきたとき、過去の栄光にしばられているとき、輝かしい未来が眼前に迫っているとき、未来の見通しを何ももたないとき、圧倒的な現在のただ中で過去も未来も見えていないとき、等々……。例えば精神医学の研究に示されてきたように、時間意識が歪み、過去への焦燥、現在への執着、あるいは未来への憧憬が度を越したものとなると、日常生活や対人関係にも病理的な症状が現われてくることになる。またそもそも、第1部の時間理論や第2部の時間概念のところで見えてきたように、過去、現在、未来を明確に区分できるとする時間の捉え方そのものが、一定の時代や文化の産物である。その視点から見れば、過去、現在、未来が溶け合っていたり、それとは異なる区分をもつ時間意識もありうる。

したがって社会に関しても、いまここにある社会がどのようなものであるか、あるいはどのようなものであるべきかを考えるとき、その社会のあり方の認識と、その社会の現在から見た過去や未来の展望とは、不可分のものである。

そこで第3部「社会の時間意識 過去・現在・未来の時間」では、社会のあり方やその変化に対する認識と、その社会における時間意識との結びつきを、進歩や退歩の観念による社会変動観、「改元」にともなうメディア・イベント、ニヒリズムという思想を例に順に論じていく。

まず第8章「進歩と退歩の時間意識 19世紀西洋思想における社会変動観とその変容」（吉田耕平）では、近代社会の揺籃の地である19世紀の西洋における社会変動観と、近代の時間意識との関わりを見ていく。そこで明らかにされていくのは、19世紀には進歩と退歩の双方が組み合わされてさまざまに論じられた近代の社会変動が、やがて直線的な社会変動観へと転じていった、ということである。ここでは近代のいわゆる直線的時間概念の偶有性が示唆されており、直線的時間概念もまた当初から近代社会において自明なものとして受容されていたのではなく、近代の社会変動観の変遷や現実の社会変動と結びつくなかで、やがて発展し定着していったものである、という重要な指摘がされている。

次に第9章「元号の時間意識 なぜ人々は『令和』の発表をテレビの生中継で見たのか？」

(鈴木洋仁) では、現代日本でなお天皇の在位期間と結びついて用いられる元号という年代記法と、その「改元」にともなう時間意識の現われについて、「平成」から「令和」への改元時を例に、特にテレビを中心とするメディア・イベントとの関わりから論じていく。そこで明らかにされていくのは、単に人びとに“元号とは時代区分であり、改元とは時代区分の変更である”ということ、さらに元号が変わることで社会も変わるということが信じられているというのではなく、むしろ本当にそうであるかを確かめるために、テレビによる改元報道が多くの人びとによってリアルタイムで視聴された、ということである。つまり人びとが改元にともなうさまざまな報道をリアルタイムで現に目撃することで、いわば遡及的に時代区分の変更が成り立った可能性が示唆される。

最後に第10章「ニヒリズムの時間展望 見田宗介の時間論・再考」(徳宮俊貴) では、見田宗介(真木悠介)による近代の直線的時間概念とニヒリズムとの結びつきに関する論考に依拠し、現代社会におけるニヒリズムへの対抗形式にともなう時間意識が検討される。そこで指摘されるのは、近代社会における直線的時間概念のもと、現在の道具化が死の恐怖や生の虚無とむすびつく意味喪失をもたらしたにもかかわらず、なお進むべき未来による生の規定という対抗形式でニヒリズムの克服が計られてきたのに対し、成長の限界と未来に対する不信感によって、あらためてその現代に続く未来主義的な構想の問題が露わになった、ということである。そこから本章では、持続可能な発展という現代のスローガンにも、疑問が突きつけられている。